

政治的リーダーの資質に関する 政治心理学的アプローチ ——エゴグラム分析の応用試論——

A Framework for Analysis of a Political Leader's Traits in Political Psychology

—From the Viewpoint of the EGOGRAM Approach—

石井 貫太郎
Kantaro ISHII

Abstract

This paper attempts to introduce an analytical framework for study of the traits of political leadership from the viewpoint of the EGOGRAM Approaches. The theory of leadership started with the studies of politicians in the disciplines of history and political science. Recently, behavioral science approach has been adopted in the related fields of psychology and business administration.

Generally speaking, there are two main categories of approaches in the theory of leadership, namely, personal idiosyncrasy approach and behavioral science approach. The first approach posits that the essence of leadership relates to the human character of a leader, and the second, to their behavior. Behavioral science approach can further be divided into typological approach and environmental approach. Typological approach focuses on the behavioral patterns of a leader, and the latter focuses on the conditions that surround a leader.

For the further study of the leadership of politician, it is important to recognize its factor of his trait. Therefore, the Transactional Analysis and the EGOGRAM approach are effectively for analysis of trait factors of political leadership. Political leadership is a concept to understanding political process, political philosophy and outcomes. Many disciplines have contributed to the study of leadership, including political theory, history, management studies and psychology. This paper make use of Tokyo University Egogram (TEG) to understand the essence of political leadership.

キーワード：リーダーシップ、政治心理学、交流分析、エゴグラム、資質論

Key Words：leadership, Political Psychology, Transactional Analysis: TA, Egogram, Trait Approach

<目次>

1. 問題の所在
2. 分析的枠組
 - (1) リーダーシップ学の先行研究の動向
 - (2) 資質分析の必要性和政治心理学的アプローチの必要性
3. リーダーシップ研究とエゴグラム分析
 - (1) エゴグラム分析の概要
 - (2) エゴグラム分析の応用試論
 - (3) エゴグラム分析の評価
 - (4) エゴグラム分析の問題点
4. 結論
 - (1) 要約
 - (2) 展望

注釈

参考文献

1. 問題の所在

本稿の目的は、現代政治学における重要な課題の一つである「政治的リーダーにふさわしい資質とは何か」という問題へのアプローチを頭上に仰ぎながら、そのような「資質研究」を遂行する方法として社会心理学の分野で発達した「エゴグラム分析」の手法を応用し、もって政治的リーダーの資質を分析する手法例の一つとして提示することにある。

昨今、わが国の政治社会における国民の需要として、信頼できる政治的リーダーの到来を望む声が高まっている。こうしたリーダー待望論は、過去の人類史それぞれの時代において、社会に大きな変動が訪れる場合には必ず生起する代表的な現象の一つであった。現代もその御多分に漏れず、「だれか助けてくれないか」という救世主願望である。

特に、民主主義的な大衆社会において解決困難な社会問題が生起すると、国民がその役割と責任を一人の卓越した力量を有するリーダーに任せたい傾向が強くなる。それが財産も地位も名誉もないわれわれ庶民の人情というものであろう。さらにその傾向は、経済社会や企業組織などにおいても一般化して顕著になっていく。かくて現代の日本社会には、政府官庁をはじめ、民間企業、学校、病院、果てはNGOに至るまで、随所でリーダーシップ論のブームが到来した。そこでは、望ましいリーダーシップとは何か、いかなる人物がリーダーとなるにふさ

わしいのかという問題が議論され、主として経営学、心理学、社会学などの分野において、多種多様な研究が展開されている。⁽¹⁾

しかしながら、本来、リーダーシップという概念を議論する役割を担っていたのは、何といっても政治学や歴史学であった。リーダーシップという言葉そのものが、国家の運営に携わる人々の活動を意味するものだったからである。古代のプラトン、中世のマキアヴェッリ、近代のヴェーバーなど、権力装置としての国家を主導する政治的リーダーの資質や行動を論じた研究成果は、現代にも広く伝えられている。その後、政治的民主主義と経済的平準化の波の進行は、こうした他者にはないリーダーとしての資質を有する「偉人」「超人」を研究する視座としてのリーダー論を議論の片隅へ追いやり、誰でも努力をすればリーダーになれるという信仰の下に、いわば「万人リーダーシップ論」とも言うべき行動科学的な手法を用いた研究体系を作り上げていったのである。

本稿では、このような政治的リーダーの「行動」に着目した議論だけではリーダーシップの本質を見極めることには限界があり、やはり当該リーダーの人間的な「資質」を分析する視座が必要であるとの認識に立ち、その手法例としての「エゴグラム分析」の応用という作業を展開する。

なお、本稿で取り扱うリーダーシップとは、あくまでも「政治的リーダー」「政治家」「政策決定者」などの政治的活動を遂行するリーダーを対象としたものであり、企業その他の非政治的組織のリーダーを念頭に置いたものではないことを付言しておく。

2. 分析的枠組

ところで、すでに指摘したように、現代に至るまでのリーダーシップに関する研究は、概して以下の2つのカテゴリーに分かれて進化することになった。第一に、リーダーシップの資質論であり、第二に、リーダーシップの行動論である。また、後者はさらに、リーダーシップの類型論と、リーダーシップの状況論に二分することができる。

(1) リーダーシップ学の先行研究の動向

① リーダーシップの資質論

まず第1にリーダーシップの資質論である。⁽²⁾ これは、リーダーに必要な人間的資質を論ずる研究であり、特に過去の歴史上に輩出した偉大な人物、たとえば皇帝、政治家、企業家などの性格や人柄とその背景としての時代状況を考察する人物研究の業績が多かったため、別名で偉人理論とも呼ばれている。ここでは、有能なリーダーに共通に見られる特徴として、年長者である、背が高い、容姿に優れているなどの身体的特徴や、高学歴である、上位の出身階層であるなどの社会的背景、知能指数が高い、柔軟なパーソナリティである、社交性に富むなどの内面的な要素がリストアップされている。

しかし後年、こうした特性が有能なリーダーに一貫して見られるとは言えず、また、リーダ

ーがこうした特性を備えていれば組織の成果が好ましい方向へ向かうとは必ずしもいえないという事情から理論としての妥当性が批判され、リーダーシップは資質ではなく行動であると考えられる議論が登場する。

②リーダーシップの行動論

このようなリーダーシップの行動論には、2つの種類がある。⁽³⁾ まず最初に類型論というもので、これは、リーダーシップは人間的要素よりもリーダーの行動形態であるという認識から、リーダーが取るべき種々の行動の類型化を試みた研究である。ここではリーダーの行動がいくつかのカテゴリーに分類され、それが組織の構成員にどのような影響を与えるかが論じられていた。ただし、こうした議論では、それぞれのリーダーシップのタイプが適用される組織や社会の性格や規模という視点が欠落していた。組織や社会は皆一様のものではなくそれぞれ別の性格を有しており、また、ある特定の一つの組織や社会が時間の経過と共にその性格を変化させていくこともあるからである。

そこで、こうした認識を土台として、リーダーシップをそれが適用される側の視点から考察したのが、次の状況論というものであった。ここでは、当該リーダーの取る行動がどのような条件の下で効果的であり、また逆にいかなる条件の下で効果的でないかが論じられ、主としてリーダーが率いる組織の構成員のタイプによってリーダーシップが議論されるものが多い。かくてリーダーシップ研究の主流は、特定人物の人間的要素を研究する資質論から、万人に適用可能な行動論へと移行していったのである。

(2) 資質分析の復権と政治心理学的アプローチの必要性

しかし、リーダーの人間的資質と彼もしくは彼女が発揮するリーダーシップの間には、行動論でいわれているよりももっと強い関係があると考えられる必要もある。なぜなら、たとえば同じことを命令される場合にも、ある人にいわれると素直にいうとおりにできるのに他の人にいわれると気が進まないような場合もあるからである。したがって、そこでは政治学や歴史学において重視されてきたリーダー個人の気質や性格などの資質論的な要素に関する検討が必要とされていると考えられる。

企業組織をはじめとする民間の社会組織のリーダーシップと国家のような公的な社会組織のリーダーシップとを比較した場合に、後者は前者よりもその権力体系が制度的に公的であるがゆえに、リーダーの人間的資質が政策のいかに反映される傾向が強い。換言すれば、政治的リーダーは国家の指導者としてのリーダーであり、したがってそれが政治権力たる強制力をももたず職掌にある限り、経営体である企業やその他一般の組織体のリーダーたち以上に、国民に対して現実に生起し、かつ実行し得る生殺与奪の権限を有するリーダーなのである。政治的リーダーのいかに問う議論においては、リーダーシップの行動面を重視する研究とともに、このような人間的資質の研究も重視される必要がある。

そこで本稿では、こうしたリーダーの「資質」を分析する手法として、いわゆる「エゴグラム分析」の手法を応用する試みを展開していく。

3. リーダーシップ研究とエゴグラム分析

まず、エゴグラム分析の手法を理解するために、それを生み出す母体となった「交流分析」という議論を解説し、次いでエゴグラム分析の概念を紹介しつつ、さらに、その今日的最新形態である「東大TEG（質問紙法）」の手法を解説していく。

（1）エゴグラム分析の概要

①交流分析とは何か？

交流分析を創始したのはカナダ人のエリック・バーン（Eric Berne）であり、当初、彼は外科医であった父の後を継いだ。その後、精神分析の分野へ興味を転じ、米国へ渡ってポール・フェダーン（Paul Federn）の師事を受けた。さらに、カリフォルニアでエリック・エリクソン（Eric Erickson）から指導を受けたのをきっかけに、1950年代頃から独自のパーソナリティ理論と治療法を研究・発展させ、いわゆる交流分析の基礎概念を作り上げていくことになった。⁽⁴⁾

交流分析を理解するためのキーワードの第一は、「自我状態の構造モデル」である。自我状態というのは、人間の思考、感情、行動のパターンを包括したものである。これは、「親（P：Parent）」「成人（A：Adult）」「子供（C：Child）」の三つに分類される。

たとえば、人間が子供や部下を指導したりする時に、自分の親と似たような行動や考え方をしている場合がある。これを親の自我状態にいるという。同様に、自分の知識や体力を用いて他者の力を借りずに問題を解決しようとしている時は成人の自我状態にあるといい、また同窓会等で昔からの気心の知れた仲間と一緒に過ごす時間などでは童心に返って子供の自我状態にあるという。こうした自我状態は状況に応じて変化するが、それぞれの状態は一連の流れを持ち、まとまった人格を形成しているわけである。

交流分析を理解するためのキーワードの第二は、「自我状態の機能モデル」である。これは、上記のような構造を元に、自分の自我状態がどのように機能しているのかを分析するためのコンセプトである。

ここでは、Aはそのままで一つの形態であるが、PとCがそれぞれ二つに分かれる。まず、Pは「批判的親：CP（Critical Parent）」と「養育的親：NP（Nurturing Parent）」に分かれ、前者は厳格な父親的自我であり、後者は世話好きな母親的自我である。また、Cも「自由な子供：FC（Free Child）」と「順応した子供：AC（Adapted Child）」とに分かれ、前者は自由闊達な子供の自我であり、後者は順応した従順な子供の自我である。なお、これらの自我の一般的特徴を整理した上で、それらが政治的リーダーの資質という観点からどのように解釈できるのかを列挙すると、以下のようになる。

C P：責任感が強く、厳格で、批判的であり、理想をかかげる完全主義者である。したがって、C Pが高ければ政治家としての強力なリーダーシップを発揮できる反面、権威的・威圧的で他者否定に陥りやすい。逆に、C Pが低ければ友好的になる反面、自己に対する責任や倫理に甘くなり、他者への指導性も喪失する。

N P：思いやりがあり、世話好きで、やさしく、受容的で、同情しやすい。したがって、N Pが高いと他者にやさしく思いやりのある行動を取る親しみのある政治家として人気が出るが、その反面、他者への奉仕がストレスとなって健康を害しやすい。また、N Pが低いと、他人にあまり関心がなく、閉鎖的で思いやりに欠けるといふ、政治家としてはまったくその器量を有しない性格となる。

A：現実的で、事実を重視し、沈着冷静で、効率的に行動し、客観性を重んじる。したがって、Aが高いと政治家として最も必要な中立的で合理的・理性的な判断や行動を取れるようになる反面、冷たくユーモアに欠けるために人気が出ない場合が多い。また、Aが低いと事実や理性よりも感情や雰囲気によって左右される朝令暮改的で迷惑な政治家となる。

F C：自由奔放であり、感情を直接的に表現し、明朗快活で、創造的で、活動的である。したがって、F Cが高いと好奇心が旺盛で明るく積極的な創造性を有する政治家となるが、その反面、行動の制御が利かずに他者への配慮にかけるところがある。逆に、F Cが低いと消極的で沈みがちな暗いイメージを持たれ、政治家としては向かいにくい性格となる。

A C：他人の評価を気にし、他者を優先し、遠慮しがちで、自己主張が少なく、良い子としてふるまう。したがって、A Cが高いと他者に依存し感化されやすい信念に欠けた政治家となり、協調性はあっても主体性に欠け、選挙の結果ばかりを気にするタイプとなる。逆に、A Cが低いと非協調的で融通が効かない反面、他人に惑わされずに主体性を持った政治家になる可能性がある。

なお、交流分析を理解するためのキーワードには、この他にも「交流パターン」や「心理ゲーム」「人生脚本」「ストローク」「時間の構造化」「人生の立場」などがある。たとえば「交流パターン」は、人間と人間とのコミュニケーション方法に関する一定のパターンを類型化したものであり、これには、お互いの交流が発展的になる相補的交流と、お互いの交流がすれ違いになる交叉的交流、さらには、表面には現れないメッセージが隠された裏面的交流の三つがある。しかし、本稿の議論の目的意識からき若干外れるため、ここでは特に以下のキーワードの解説は省略する。

②エゴグラム分析とは何か？

バーンの弟子であったデュセイ (J. M. Dusay) は、T Aグループ療法を行なう中で自我状態を量的に表現するために「エゴグラム」を考案した。⁽⁵⁾ この方法では、まず、被験者が自己診断をした上で、直感的に最も頻繁に出てくる自我状態を棒グラフに書き、次に、最も少ない頻度で出てくる自我状態を書き込む。他の自我状態は、この二つの棒をもとに推測して相対的な高さで書きこみ、できあがったエゴグラムのパターンを類型化してそれぞれのパーソナリティを論ずるというものである。

(記入例)

CP : _____

NP : _____

A : _____

FC : _____

AC : _____

③東大式エゴグラム (TEG) とは何か？

ところで、デュセイのエゴグラムは直感的に描くものであったが、それをより客観的な指標とするために、後にこれを質問紙による回答を集計して数量的に表現する方法が考案された。これが「質問紙法エゴグラム」であり、米国のロバート・ハイヤー (Robert Heyer)、日本の杉田教授や岩井教授らが先駆的業績を提示した後、数多くのエゴグラムが開発されるようになった。

中でも、東大式エゴグラム (TEG) は、1984年、1993年、2006年と3回にわたる改訂を経て、質問紙法エゴグラムの最新にして最も有効な成果を期待できる手法としての地位を世界的に確立している。⁽⁶⁾ この手法は、もともと企業などの内部組織における所属員もしくは所属員同士の社会的コミュニケーションの円滑化を目的として発達したものであるが、以下に、その質問事項の全文を紹介する。⁽⁷⁾

・ CPに関連する質問事項

納得のいかないことに抗議をする

良いと思うことは貫く

自分に厳しい

一度決めたことはやり通す

責任感が強い

他人に指図されるより指図する方が多い

良くないことは指摘する

言うべきことは言う

ついリーダーシップを取ってしまう

常に向上心を持つ

・ NPに関連する質問事項

寛大である

心が広い

人の気持ちが良く分かる

何気ない気配りをする

人の気持ちがなごむように話をする

人助けをすることに喜びを感じる

親身になって行動する

人にやさしい言葉をかける

人には暖かく接している

人の役に立つよう行動する

・ Aに関連する質問事項

他人の話を聞くとときに根拠を求める

物事には常に原因があるから結果があると考え

理屈っぽい

議論を好む

何かを始める前には情報を集める

物事を言葉できちんと説明できる

事実の確認を行なう

予測して行動する

論理的である

筋道立てて考える

・ FCに関連する質問事項

ユーモアのセンスがある

いつも楽しめることを探している

新しいことをやってみることが多い

のびのびと振る舞うことができる

人見知りをしない

人を笑わせることが得意である

常にその場を楽しむことができる
 みんなと賑やかに騒ぐのが好きだ
 明るい
 よく笑う

・ ACに関連する質問事項

他人の言うことに左右されやすい
 他人の評価が気になる
 他人の目を気にして行動することが多い
 一度決めたことがよくぐらつく
 他人に指図されることが多い
 しばしば人から言われた通りに行動してしまう
 人の顔色をうかがってしまう
 人の言うことが気になる
 優柔不断である
 決断することが苦手である

(2) エゴグラム分析の応用試論

さて、以上に見てきたようなエゴグラム分析の手法を、政治的リーダーを評価する基準として活用するために、先の東大式エゴグラムの質問事項をそれぞれ翻訳してみよう。この場合、特に重要な点は、それがあくまでも政治的リーダーたる本人が受験するものではなく、分析対象者である彼もしくは彼女を観察する第三者、すなわち他人が用いる手法として変換する必要があるということである。なぜなら、政治家や政治家の候補者にこれを被験者として受験させることは本人の同意がなければ不可能であり、しかしながらわれわれ有権者は、彼もしくは彼女の周囲からこれを観察してその地位や役職にふさわしいか否かを判定しなければ投票ができないからである。手法を用いる際のこうした主体と客体の逆転こそ、本稿が提示するモデルの妥当性を論ずる場合の最大の問題点となるであろう。

・ CPに関連するチェック事項

あの人は納得のいかないことに抗議をするタイプのように見える
 あの人は良いと思うことは貫きそうに見える
 あの人は自分に厳しい人間のように見える
 あの人は一度決めたことはやり通すタイプのように見える
 あの人は責任感が強いように見える
 あの人は他人に指図されるより指図する方が多いように感じる

あの人は良くないことは指摘するように見える
 あの人は言うべきことは言うタイプのように見える
 あの人はついリーダーシップを取ってしまうタイプのように感じる
 あの人は常に向上心を持っているように見える

・ NPに関連するチェック事項

あの人は寛大であるように感じる
 あの人は心が広いように感じる
 あの人は人の気持ちが良く分かるように思える
 あの人は何気ない気配りをするタイプのように見える
 あの人は人の気持ちがなごむように話をするように感じる
 あの人は人助けをすることに喜びを感じているように見える
 あの人は親身になって行動するよう感じる
 あの人は人にやさしい言葉をかけるタイプのように感じる
 あの人は人には暖かく接しているように見える
 あの人は人の役に立つよう行動するよう見える

・ Aに関連するチェック事項

あの人は他人の話を聞くときに根拠を求めるタイプのように感じる
 あの人は物事には常に原因があるから結果があると考えるタイプのように見える
 あの人は理屈っぽいように見える
 あの人は議論を好むように見える
 あの人は何かを始める前には情報を集めるタイプのように見える
 あの人は物事を言葉できちんと説明できるように感じる
 あの人は事実の確認を行なうタイプのように感じる
 あの人は予測して行動するタイプのように見える
 あの人は論理的であるように感じる
 あの人は筋道立てて考えているように感じる

・ FCに関連するチェック事項

あの人はユーモアのセンスがあるように感じる
 あの人はいつも楽しめることを探しているように見える
 あの人は新しいことをやってみることが多いように感じる
 あの人はのびのびと振る舞うことができるタイプのように見える
 あの人は人見知りをしないタイプのように感じる

あの人は人を笑わせることが得意であるように感じる
 あの人は常にその場を楽しむことができるように見える
 あの人はみんなと賑やかに騒ぐのが好きなように感じる
 あの人は明るい人のように見える
 あの人はよく笑うように感じる

・ A Cに関連するチェック事項

あの人は他人の言うことに左右されやすいタイプのように見える
 あの人は他人の評価が気になるタイプのように感じる
 あの人は他人の目を気にして行動することが多いように感じる
 あの人は一度決めたことがよくぐらつくタイプのように感じる
 あの人は他人に指図されることが多いように感じる
 あの人はしばしば人から言われた通りに行動してしまうタイプのように見える
 あの人は人の顔色をうかがってしまうタイプのように感じる
 あの人は人の言うことが気になるタイプのように感じる
 あの人は優柔不断であるように見える
 あの人は決断することが苦手であるように感じる

(3) エゴグラム分析の評価

ところで、上記で提示した質問紙によって得られたエゴグラム分析の結果は、政治的リーダーの資質という側面から解釈した場合には、それぞれ以下のように評価できると考えられる。

C P：この要素が高い値であることは、人々を引っ張っていく立場にある政治的リーダーにとってある程度は必要ではあるが、度が過ぎれば独裁的なリーダーシップを発揮するタイプに変容する可能性がある。

N P：同様に、この要素が高い値であることは、政治的リーダーにとってある程度は必要ではあるが、やはり度を越せば弱者・貧者の救済・福祉にばかり気を取られ、国家の舵取りにとって重要な外交や安全保障への気配りをおろそかにするリーダーとなる可能性がある。

A：政治的リーダーにとって最も必要不可欠な要素がこれであり、この値が高いことは政治家の重要な要件の一つであると考えられる。しかし、本人が有能かつ冷徹で合理的な判断を下せる性格であるために、度が過ぎれば他者への思いやりや弱者に対する愛情が不足したリーダーとなる可能性がある。

FC：国家が構造的な改革や新しい制度の創設などを遂行していく際の政治的リーダーには、この値が高いことは必須条件ではあるが、度を越せば景気の良いお祭り騒ぎにばかり奔走する無責任なリーダーとなる可能性がある。

AC：この要素が高いことは、すでに出来あがっている体制を維持していく役割を担う政治的リーダーとしては有能であるが、その反面、創造性のある仕事には不向きであり、むしろリーダーの補佐役としての立場が似合うタイプであり、政治家よりも官僚・役人に適したタイプであると言えるであろう。

(4) エゴグラム分析の問題点

ところで、以上に試行してきたような政治的リーダーの資質研究におけるエゴグラム分析の適用には、いかなる問題点があるだろうか。ここでは以下の3点について指摘しておく。

第一に、エゴグラム分析、特に質問紙法の手法が有効な成果を挙げるためには、まず、被験者である回答者本人が自己の行動に関する正確な認識を有していることと同時に、やはり被験者である回答者本人が質問事項に対して率直かつ正直に回答することの二つの前提条件が満たされていることが必要である。しかしながら、えてして人間は他人の行動を観察する作業に対して自己の行動を観察する作業にはバイアスが伴う可能性が大きく、むしろ自己評価よりも他者からの評価がより核心的な本質を言い当てている場合も多い。また、自分でよく自覚している行動癖についても、それを素直に回答することをためらい、あえて異なる回答をする場合も考えられるのである。

第二に、エゴグラム分析はもともとある主体が自身の性格を分析し、本人がその結果を参考にしながら社会や組織におけるより円滑なコミュニケーション関係を構築するために利用する手法であり、その本質はあくまでも自己評価である。したがって、そこで得られた分析の結果は善悪やランキングを論ずるためのものではなく、被験者である自己の参考資料としての側面が重んじられている。しかしながら、ここで分析対象とされている政治的リーダー立場の人物は、企業その他の非政治的リーダーとは異なり、強制性を伴う政治権力によって国民の生殺与奪を左右する権限を持つ公式のリーダーである。したがって、その資質を評価し、彼もしくは彼女に支持を与えるか否かという判定を下す作業は、国民にとっての死活的問題であると同時に、国家にとっての命運を左右する最需要問題のひとつである。したがって、その「公共の福祉」の要請度はリーダーという個人の「基本的人権」をある程度制限し得るものであり、ここに、政治的リーダーの資質に対するエゴグラム分析の正当性を見出すことが可能となるであろう。

第三に、エゴグラム分析の本来の分析対象は被験者本人であり、自身が自身を評価するための手法であって、他者が特定人物を評価するための手法ではない。したがって、ここで提示した分析手法の結果にどの程度信頼性をおけるものであるのかが問われることになる。しかしな

がら、エゴグラム分析は直感法であれ質問紙法であれ、被験者である本人が回答したからといって必ずしもそれが本質的な真理であるとは限らない。特に、政治家が被験者となった場合には、本人が自分を本来の姿よりも大きく見せたいという衝動から、正直な回答をせず、自己の理想とするイメージの人物を装って歪曲した回答をする可能性も多分にある。また、エゴグラム分析の質問紙法で設定されている各質問事項はもともと主観的回答を引き出すための文言であるが、この文言を主客転換すれば容易に第三者による特定人物の評価、すなわち客観的回答を引き出すための文言に転換することが可能である。そうであれば、統計学上の大数法則の論理と相まって、その評価者の数が多ければ多いほど、むしろ当該人物の真実の姿に肉迫することが期待できるといえよう。

このように考えてくれば、本稿で試行したような政治的リーダーの資質に関するエゴグラム分析の結果は、まず、有権者がある特定の政治家に投票するか否かの参考的な指標となるだけでなく、次に、自分が政治家に立候補するか否かの決断をする際の参考的な指標となるとともに、さらには、現職の政治家たちにとってもある種の他者診断の参考的な指標となり、自分の性格的な長所や短所を知ることにより、自己改革をしたり、身の程を知ったりするための重要かつ貴重な資料となる可能性があると言えよう。

4. 結論

(1) 要約

本稿では、現代政治学における重要な課題の一つである「政治的リーダーにふさわしい資質とは何か」という問題へのアプローチを頭上に仰ぎながら、そのような「資質研究」を遂行する方法として社会心理学の分野で発達した「エゴグラム分析」の手法を応用し、もって政治的リーダーの資質を分析する手法例の一つとして提示する作業の一例を展開した。以下、その過程で明らかになったことを列挙する。

第一に、政治的リーダーのリーダーシップを分析する視角として、従来の主流の研究成果であった行動論的アプローチに限界があり、そこに資質論的アプローチを加味する必要がある限りにおいて、本稿で提示した手法は一定の有効な成果を生み出す可能性がある。

第二に、本稿で提示した手法はいわば主体と客体を逆転させた「翻訳モデル」であり、本来は主体が自ら利用する手法を客体が利用する手法に応用した点において限界があり、この点について、今後の議論をより精緻化していく必要がある。

第三に、しかしながら、政治的リーダーを対象とする限りにおいては、他の非政治的組織のリーダーとは異なり、こうした「客体的視点」からの分析が必要不可欠であり、本稿と同種の研究成果が今後も多に望まれるものである。

(2) 展望

以上のように、政治的リーダーのリーダーシップを分析する視角としての行動論に限界があ

り、当該リーダーの資質を分析する必要があるならば、本稿で提示された手法は一定の学術的な価値を有する研究成果であると考えられる。なぜなら、有り余る財産と教養と時間を有する市民のみが選挙権を有していた制限選挙の時代とは異なり、日々の生活に追われる我々庶民が有権者となる普通選挙制度を実現した大衆民主主義の時代においては、投票行動はともすれば理性ではなく感情で行なわれてしまう傾向にあり、それを少しでも防ぐ方法の一つは、我々がもっと政治学やリーダーシップ論の成果を知り、理性によって投票する程度を強めていくことであるからに他ならない（感情投票から理性投票へ）。それは、公的な組織体である国家の指導者＝政治家を選出するという重要な役割を担う政治的動物としての我々国民に課せられた、およそ最大の課題の一つであるといえよう。

すなわち、現代の日本国民には、もっとリーダーシップ論や政治学に親しむ必要だけでなく責任も課せられているというわけである。その意味で、本稿に示されたいわば政治家候補者に対する「評価シート」としても応用できる手法の一例は、国民の投票行動における一つの参考的価値を有すると考えられる。したがって、今後はこの手法を適用した実証研究の蓄積が必要となる。

【注釈】

- (1) リーダーシップ研究全体の研究動向については、石井（2004）第1章に詳しい。また、政治的リーダーシップについては、Blondel（1987）やElcock（2001）などが有用である。特に、古典的な名著として、Paige（1977）が挙げられる。また、政治心理学的な視角からの先駆的業績の一つに、Simonton（1987）がある。
- (2) リーダーシップの資質論の研究動向については、石井（2004）第2章に詳しい。
- (3) リーダーシップの行動論の研究動向については、石井（2004）第3章に詳しい。特に、Misumi（1985）は、わが国の研究者の手による世界的な業績として高く評価されている。
- (4) 交流分析の解説については、Berne（1964）やStewart and Jones（1987）に詳しい。
- (5) エゴグラム分析の解説については、Dusay（1977）に詳しい。また、その活用については、Goulding and Goulding（1979）、Heyer（1979）、Heyer（1987）などが代表的である。
- (6) 東大式エゴグラム（TEG）の原典としては、東京大学医学部心療内科（2006）、東京大学医学部心療内科（1993）、岩井・他（1993）などを見よ。
- (7) 以下の記述は、東京大学医学部心療内科（2006）29～31頁による。

【参考文献】

- Berne, E., *Games People Play*, Grove Press, 1964（南博訳『人生ゲーム入門（新装版）』河出書房新社、1994年）
- Blondel, J., *Political Leadership: Towards a General Analysis*, Sage Publishers, 1987.
- Dusay, J.M., *EGOGRAMS: How I See You and You See Me?*, Harper and Row Publishers, 1977（池見西次郎監修・新里里春訳『エゴグラム』創元社、1980年）
- Elcock, H. J., *Political Leadership: New Horizon in Public Policy*, Edward Elgar Publishers, 2001.
- フェルドマン, オフェル『政治心理学』（ミネルヴァ書房、2006年）

- Goulding, M.M. and R.L. Goulding, *Changings Lives through Redecision Therapy*, Brunner / Manzal Publishers, 1979 (深見道子訳『自己実現への再決断』星和書店、1980年)
- Heyer, N.R., Development of a Questionnaire to Measure Ego States with Some Applications to Social and Comparative Psytiatry, *TAJ*, No.9, pp.9-19, 1979.
- , Empirical Research on Ego State Theory, *TAJ*, No.11, pp.286-293, 1987.
- 石井貫太郎『リーダーシップの政治学』(東信堂、2004年)
- 『現代国際政治理論 (増補改訂版)』(ミネルヴァ書房、2002年)
- 岩井浩一・他「質問紙法エゴグラムの臨床的応用」『交流分析研究』第2巻1号(3-13頁)1993年所収。
- 河田潤一・他『ハンドブック政治心理学』(北樹出版、2003年)
- Misumi, J., *The Behavioral Science of Leadership: An Interdisciplinary Japanese Research Program*, University of Michigan Press, 1985.
- Paige, G. D., *The Scientific Study of Political Leadership*, Free Press, 1977.
- Simonton, D. K., *Why Presidents Succeed: A Political Psychology of Leadership*, Yale University Press, 1987.
- Stewart, I., and V. Jones, *TA TODAY*, Life Space Publishing, 1987 (深見道子監訳『TA TODAY』実務教育出版、1991年)
- 東京大学医学部心療内科編著『新版TEGⅡ：解説とエゴグラム・パターン』(金子書房、2006年)
- 『新版エゴグラム・パターン：TEG(東大式エゴグラム)第2版による性格分析』(金子書房、1993年)